
カラフル

蓮獅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラフル

【Nコード】

N4818BA

【作者名】

蓮獅子

【あらすじ】

カンパリソーダに添える君の細い指に、僕の心はシンプルに恋をした。

好きになった女性はセックスフレンドの妹。歌舞伎町で働くバーテンダーの恋は4カ月後、冬の始まりと共に別れを告げる。

CAMPARI

——その声に心は見事にほだされる。

セックスフレンドの由希から電話があったのは、仕事が終わってすぐの午前0時を回ったところだった。

「今からうちの部屋で飲まない？」

由希が住んでいる場所は確か世田谷の明大前、新宿駅へ向かう帰路は相変わらずのいきれ。由希が退院して間もないことを考えるとセックスをすることですら一歩身を引く、ましてや子宮……。

「からだはもう大丈夫。それに、妹と一緒にいるからそういうんじゃないわよ」

そのことばで気が楽になった気がした。頭の中は家路への埼京線から京王線に切り替わり、到着の予定時間を考える。明大前には行ったことはないけれど、居酒屋の1件くらいあるだろうと言う予想は、都心に住んでいたら大概が正解する。

「部屋にカンパリがあるの。本物のバーテンさんに作ってもらいたいんだ」

コンビニに寄ってソーダ水とレモンを買って、由希の妹の好みまで走らないけれど適当につまみを選んだ。ポテトチップにチョコレート、それにカシューナッツ、多分それで十分だろう。

由希には確か彼氏がいたはず、駅のホームの人波の中でコンビニ袋を片手に考えてみた。妹にはおれのことをなんて紹介するんだろ

う、そんな悩んだところで友達——確かにトモダチには違わない。
ホームとホームの間から見える夜の空は、雲かスモッグかは知らないけれどいつもと変わらない。月も見えない。

今日は水曜日になったんだ、なんて考えてたらホームに電車が入ってきた。人と人へと押されて後はそれに任せるまま、波が止まったところで立ち止まる。すると、二十歳くらいの女の子がからだの角度を間違えたんだろう、おれと正面を向きあう姿勢になってしまった。

冗談……そのまま扉は閉まり電車はゆっくりと加速していく。正面の女の子は気まずそうに左を向く、鼻息が当たりそう、僧思ったからおれは右を向いた。胸元からは白いブラの肩ヒモがのぞいている。

今日はセックスはなし、自分で自分に言い聞かせ落ち着かせようとしても、心臓は勝手に鼓動を高めてしまう。服越しに、ブラ越しに伝わらないかなんて考えすぎだろうけど肩は、女の子の肩は小さくて手のひらですっぽりと包めそうだ。

違うことを考えた——あれは由希が入院する数日前だ。由希とラブホでセックス……確か騎上位から正常意に体位を変えたときに由希の携帯電話が鳴った。

「彼氏からだ」

「出れば？」

「今？」

「そう」

ハダカの由希は携帯電話を手に取り通話ボタンを押した。その間、

念のために腰の動きは止めている。

「もしもし……」

電話に出た由希の顔には嬉しさや笑顔はなかった。なんなら別れ話でもはじめるんじゃないかと思うほど目はまっすぐに天井を向いている。

だからちよつとイタズラを考えてみた。彼氏と電話してる由希にキスをする。驚いた由希の顔がおもしろくて舌を出してデイーブキスに発展させた。左の耳からは携帯電話からかすかに聞こえてくる彼氏の声、おれと由希の唇からは唾液の音、そつと唇を離すと「もう……」由希は多分口を動かしてそう言った。

「しいつ」って人差し指を口に運ぶ。「そつちでしょ！」そう由希の唇が動く、それを笑顔で返して腰をゆっくり動かし始めた。

「ちよつと！」

焦った由希がそう言う。「ううん、なんでもない」そんなことばを紡ぐと同時に眼を閉じる。彼氏との会話はどうやら次のデートの約束、必死で洩れそうな声をガマンして眉間にシワを立てる由紀の――欲求不満なのかな、7月の京王線の電車の中は暑く、正面の女の子の胸元にもうつすら汗がにじんでいる。

明大前で電車からホームに降り立つ。さっきまで向かい合っていた女の子はここで降りたのかそうじゃないのか、知らないけれど深く考えたら不思議なこと。けれどあまり考えずに改札へと向かった。

「今、駅に着いたけど」

由紀に電話口で案内されるまま居酒屋とラーメン屋を横目に大通りへと出た。「そついや腹減った」のことはにカレーライスのじゃ

が、いも抜き作ってあるよとの返答。なんでじゃがいも抜き……由希は確か北海道の出身だったことを思い出しながら、北海道イコールじゃがいもという図式を考えつつそれでも足取りを速める。

多分、部屋着だろうピンクのパジャマを着た由希は一際大きなマンションの下に立っていた。

「久しぶり」由希の頬が少しやせた気がした。「気を遣わせちゃった？ 重かったでしょ」

「大丈夫だよ。でも思ったより元気そうよかった」

パジャマの柄は花。なんの花かは知らないけれど、熱帯地方っぽいキレイな花だ。

「あのさ、普通は彼氏とか呼ぶんじゃない？」

「だって彼氏より雅くんの方が楽しいんだもん」

由希の部屋はマンションの2階、エレベーターに乗るとすぐに到着した。

「どうぞ」

由希に促され、1DKの部屋の玄関を開けると小さな由希が、グレーのスウェット姿で立っていた。

「こんばんは、斉藤恵理です」

「あ、どうもこんばんは。皆川雅也です」

瓜二つとまではいかないけどやっぱり小さな由希、それが恵理さんの第一印象。髪の長さも違う、目の大きさも違う、指も胸も……やっぱり欲求不満らしい。由希の「わたしの妹かわいいでしょ」っ

てことばに「そうだね」なんて答えて恵理さんがクスって笑う。女性2人に男性はおれひとり。けど2人の表情からは最低限、これから楽しい時間を過ごせることが予想できた。

「さあ入って、バーテンさん」

由希に促され厳寒に足を踏み入れたとたんに香るスパイスは、空っぽの胃をこれでもかかってくらい誘惑してる。

「おじゃまします」

薦められるテーブルの上には、デザインがかわいいグラスが3つと真つ赤なボトルが1本。

CAMPARI

イタリア生れのそのボトルの名前はカンパリ。いわゆる食前酒の類。^{たぐい}真つ赤な液体の表面は少しの新藤で波を打ち、これから始まる食事を楽しむ手助けをしてくれる。

今日は酔いそうだ、その予感は見事なほどに的中し、結果的に恵理の唇にキスをするーそして、カンパリのように恋をした。

「こんな格好でごめんなさい」

「時間が時間だし気にしないでいいですよ。それにおれこそこんな時間に……」

「なに堅いこと言ってるの」

会話の始まりはそんなだったかな。とにかくどう話題を持っていけばわからなくて、グラスを3つ手にとって氷を入れ始めた。

「バーテンさんなんですよね」

「そうですよ」

「雅くんはカクテルの全国大会にも出たことあるんだよ」

恵理さんの驚いた顔に「すごい」っていうセリフ、確か「どうせ下のほうですよ」そう言った。

「プロの人にカクテル作ってもらえるなんて嬉しいです」

「でもただ混ぜるだけですよ」

「それが素人とは違うのよ。あ、レモン切ってくるね」

由希はそう言うを買ってきたレモンを手に取り上がった。

「あ、由希、シャフトで」

「シャフトってなに？」

「あ、ああ。ヘタ取って縦に8分の1に切ってくれるかな」

そんな専門用語にいちいち感嘆する二人に、本当は鮮度の問題から6分の1って思ったけど、レモンが足りなくなりそうだし面倒だから口を紡んだ。

「シャフトでね！」

由希は自慢げにそう言ってキッチンに向かった。その間、部屋には恵理さんと2人きりになる。数年前ならそんな状況に緊張もしていただろうけど慣れ……少しは緊張しているけど仕事柄、女性と話すことになった自分。

「恵理さんって仕事は何してるんですか？」

会話がなければ「仕事は何を？」か「今日は暑いですね」のどつちかを振ればいい。後はそこから広げていく。

「看護師です」

「そうなんですか。ストレス溜まるって聞きますけど」

「はい、実は」

「解消は、お酒？」

普通、女の子の部屋にカンパリは置いていない。それに由希はカンパリを飲むと言っていた。グラスは3つ、と言うことは恵理さんもカンパリを知っている。所謂お酒がすき、それが予想。

「大好きなんです」

ビンゴ！

「シャフトできたよ」

「おお、ちゃんと芯と種までとってあるじゃん」
「任せて」

レモンをグラスに落とすとカンパリのボトルを手にし、トップを中指ではじく。

キーン……。

はじいたトップを指に挟み、カンパリ1対ソーダ水2の割合を頭の中で考えてグラスに注ぐ。霜が張った氷を洗う真つ赤なカンパリがグラスの底に到着する頃には、あとはソーダ水で満たされるのを待つばかり。

「なんかカッコイイ」
「そっかな」

恵理さんについつい貯め口になりつつも、ソーダ水をグラスに注ぎバースプーンの代わりにピンクのおはしでビルド、炭酸を飛ばさないように優しく混ぜれば完成。

「さあ、飲もう」
「うん」
「はい」

由希の隊員岩井に乾杯し、カンパリを口に付けた。其の天見と苦味が下を流れつつ香りは鼻をくすぐる。伊に到達する頃にはもう2口目を口に運んだ。

「おいしい」
「やっぱりプロが作ると違うね」
「だから混ぜるだけだって」

そういいながらも笑顔になるのは自然、カンパリが3人の会話を盛り上げるのも自然、おなががすいてるのは明大前についたあたりだから自然？

「由希、カレー食べたいんだけど」
「じゃあ、あつためてくるね」

視線がグラスから由希を追う途中、その途中で恵理さんの右手の指に止まった。恵理さんの細い人差し指と中指が、真っ赤なグラスをそっと掴んでいる様。

その細い指、カンパリのせいじゃなくてキレイだ、そう思った。

正直そう思った。

カレーは普通に、いやフツー以上においしかった。

「これ市販なの？」

「ん？ そうだよ」

「旨いね。由希が作ったの？」

「恵理と2人で、ねえ」

カンパリとカレーが妙に合う。きっとカレーの味は中辛かな、気が付けばおかわりをしていた。

「ところでさ、斉藤姉妹は北海道出身だね。なんでじゃがいも」

「…」

別に北海道だからってみんながみんなじゃがいもを好きとは限らない。その説明に納得できるような気もするけど、別につっこむ理由もない。

「カンパリのおかわりは作りますか？」

「ありがとうございます」

「お店みたい」

由希と恵理さんの2人はもうカレーを食べたらしく、おれが買ってきたつまみに手を伸ばしていた。時計はもう1時半、当然と言えば当然だろう。

「由希さ、なんだっけ、そうそう子宮内膜症と子宮筋腫ってどんななの？」

「女の子の病気」

「手術は？」
「したよ」

膨らませていい話題なのか分からなかったから「痛いの？」って聞いて「そりゃあね」って返ってきて終わりにした。その後の話は恋愛感、おもしろいくらいに盛り上がった。

「おれの店に大塚ってやつがいてさ、分かれた彼女とよりを戻そうとして東京中を探して生れ年のワインを探したらいいんだ。数万円したって言ってたかな。それで、彼女の誕生日に花束と一緒に家に持っていったら、かわいそうに玄関でワインだけ渡して門前払いだつてさ」

「ははは」
「あはは」

カンパリの減る量が早い。その分、酔いも回ってる。

「お姉ちゃんとかれしつてうまく言ってるの？」

「恵理は別れちゃったんだよね」

「その話はいいの。皆川さん、その興味ありますよっていう目は何？」

「興味あるねえ」

敬語はいつの間にかどこかに薄れ、その分恵理さんとの距離が縮まった気がした。

「わたしの彼氏さ、なんかね……」

恵理さんの「なになに」ってことばに同調して眼を向ける。3人

の右手にはカンパリ、それぞれのグラスに浮かぶ氷は透明、けれど赤い海が反射するセカイ、氷すら赤に染め上げる。

驚いたのは恵理さんと恋愛に対する価値観が同じだったこと。由希の彼氏の話が盛り上がり、どんな内容だったか正直覚えてないけど、それに対する意見は恵理さんと一緒だった。多分、恵理さんも気づいてたと思う。おれのことばに恵理さんが眼を丸くし、恵理さんのことばにおれが笑った。

「だよね」

「やっぱりそうだよね」

バーテンだからってこんなにもカンパリだけを飲んだのは初めて。ボトルの中身がもうすぐなくなる頃、ソーダ水とレモンシャフトが切れたからロックで口に注ぎ込んだ。

「でさあ、彼氏ったら先に帰っちゃったのよ」

「でさあ」の前に由希が言ったことはなんだっけ。それよりも恵理さんの横顔に、笑うと細くなる目に、白い首筋に、艶っぽい黒髪にふれてみたいって思ったのは酔ってるせい？

「雅くんは彼女つくらないの？」

由希の質問に笑ってカンパリを煽る。

「モテそうなのに」恵理さんが言う。「ほんとはいるんでしょ？」

「なんなら彼女になってください」

きつと冗談にしか聞こえていないだろう。こういうところがきつとおれの悪いことだって知ってるけど、でもカンパリのせいにはし

たくない。

「またまた」

由希の視線の隣り、笑顔の恵理さんの口元に、目は勝手にそこから離れようとしなない。

「2週間も入院してたから生活大変なんだよね」由希があくびを手で隠しながら言う。「どうしようかな」

「優しい彼氏に助けてもらったら」

恵理さんの意見に由希が「そんなに優しくないよ」って言った記憶は曖昧。時計はもう夜中の3時を回ってた。

「そろそろ帰らないと……」

「雅くん始発まだだよ」

「皆川さん少し眠っていいけに」

さすがに少し遠慮してタクシーでなんていってみは見たけど、頭の中はぐるぐるしてるし足は動きたくないらしい。

「いいんなら。じゃあ少しだけ」

恵理さんと由希のまぶたもトロンとしてる。3人でテーブルを片付けて、少しだけ残ったカンパリのボトルを冷蔵庫の隣りの棚に置いた。1DKの部屋の中、ベッドは恵理さんと行き、おれはソファに眠ることになった。

「おやすみ」

もう少し、もう少しだけ眼を開けていようと思ったけど限界で、黄色しタオルケットをかけた途端に眠ってしまったようだ。次に眼を覚めたのは大体1時間後、5時くらいだったと思う。寝付けないのはきつとなれた部屋じゃないからだと思う、カーテンの外はうつすら白い。

上体を起こすと2人はそれぞれに寝息を立てていた。ベッドの奥側には由希、恵理さんは手前で目をつぶっている。

1歩近くに寄ってみる——少し動くだけで頭がいたい、飲みすぎ、きつと明日の仕事はツライなって考えながら恵理さんの顔を覗き込んだ。今眼を覚ましたらきつとビクリするだろう、そう思ったけれどその顔は、薄い朝日に指されて、どうしようもないほどキレイだった。

キスをしよう、そう頭で難しく考えたわけじゃない。なんていうか自然に、体が動きそつとその唇に触れた。1秒か2秒、時間で言ったらそんなもんだろう、でも肌を通じて走る電気は、その一瞬に未来を、永遠を感じた。

全部カンパリのせいだ——けれどおれの心は恋をし、恵理さんのことを好きになった。

バーテンダー

「最悪だ……」

「皆川さんなんか顔色悪いですよ」

まかないを作っている高橋がおれの独り言に反応して怪訝そうに首をかしげている。

「いや、なんでもない」

ホウキとチリトリを手にバー・ブルーラグーンの開店前の掃除を続けた。

「まさか、子供ができちゃったとか……」

「アホか！」

恵理さんにキスを下あといつの間にか眠ってて、それで由希が10時くらいに起こしてくれた。帰るとき、恵理さんはまだ眠っていた。二日酔いの頭はガンガン、バックバーに並ぶお酒のボトルはできれば見たくないけど仕事は仕事。

「はああ……」

「今度はため息ですか。皆川さん、幸せが逃げますよ」

「高橋、その通りだ」

ため息と一緒に方から力が抜ける。最悪——その理由は二日酔いとかそんなじゃない。おれとしたことが、酔ってたとはいえ恵理さんの連絡先を聞き忘れた！

由希に聞くんなんて冗談じゃない、間違いなく疑われる。「どうせ

体が目的なんですよ」とか「私の妹に手を出さないで」とか言われて一貫の終わり。床に集めたチリの山がため息と一緒に飛んでいく。終わった。終わったんだ、もう……。

「はああ……」

「またですか」

正直言って高橋のまかないは旨い。さすがは元イタリアンのシェフの卵だっただけのことはある。今日の料理はトマトソースのなんとたらと鶏モモ肉のなんとかかんとか。

「高橋、この肉料理、薄味で旨いな。メニューのひとつに考えてみたらどうだ」

店長の長澤さんがそう言うのももつとも。多分、薄味にしたのはおれの体調を気遣ってくれた……どうかな。

「マジでうまいッス」

ホール担当の大塚は、相変わらずの変な目眼。だから生まれ年のワインを……。

「皆川」店長が声をかけてきた。「今日、仕事終わったら飲みに行かないか？」

今日は勘弁……そう口から出そうだったのをこらえて「一緒にします」と二つ返事なんてサラリーマンとなんら変わらない。

ブルーラグーンの開店時間は6時、歌舞伎町1番街入ってコマ劇場の裏、その場所は6時過ぎ辛きや場鞍のお姉さんの同伴で席の3分の1埋まる。平日だから多分ヒマだろう、そんな予想は歌舞伎

町には当てはまらない。

当てはまらないはずだった——まさかのヒマ、いわゆる閑古鳥が鳴いてるってやつだ。

「ヒマッスね」

「大塚、暇つぶしに昔の彼女の話でもしてくれよ」

バックバーのボトルの肩と口をウエスで拭きながらちよっと思いきい出し笑い。

「皆川さん、ネタにしてません？」

「だっておもしろいんだもん」

突然BGMが変わった。ハウスっぽいレゲエ？

「これいいだろ」店長がCDのジャケットを手に笑顔で言った。「昨日買ってきたんだ」

静かに流れるそのメロディーは、熱くなり始めた7月中旬の夜にぴたりとはハマる。さすがは元DJ長澤、さすがはSM好き……関係ないか。

「いいですね」いつの間にか高橋がタマネギ片手に隣にいた。「あとで貸してください」

そんな話をしているうちに大塚の「いらっしやいませ」の声が店内に届く、と同時に気持ちが仕事モードに切り替わる大塚以外の3人。

紫のワンピースは常連のチカさん。キャバクラ嬢……じゃなかったような、けど一生に北中年の男性は始めてみる顔だ。

「オーダー入ります。カンパリソーダと生ビールです」

カンパリソーダ——少しの間だけ忘れてたのに、こうも簡単に記憶は蘇る。「かしこまりました」そう言々とバックバーからカンパリのボトルを逆手に取り宙で半回転させてボディーを掴みトップをはじく。

グラスに添えられた恵理さんの細い指のフラッシュは鮮明で、濟んだ真つ赤なカンパリは彼女の手の中でたゆたう海？

「お願いします」

カンパリソーダと生ビールを大塚が慣れた手つきでトレンチに乗せる。大塚とカンパリ……見比べたら笑いそうになった。

「いらつしゃいませ」

店長の声に反応し入口に視線を送る。そこにいる男性は、池袋にあるダイニングバー・ラストイーの店長の平山さん。平山さんは店長と談笑したあとカウンターに座った。

「平山さん、今日は休みなんですか？」

「水曜日はひまだから定休日にしたんだ」

笑顔で語る平山さんの、いつものようにセットしてない髪形に疲れを感じた。平山さんはブラントン・ブラックのロックをオーダー。相変わらずの酒好きは健在、少しだけ安心した。

大概、カウンターに座るお客様はカウンターが好きかバーテンと会話がしたいから。そっとしておいてほしいお客様は今日のチカさんみたいにテーブル席に座る。

「最近ラスティーは忙しいんですか？」

「いやいや、名前通り錆びれちまってるよ」

錆びた釘っていう名前のラスティーネイルはウイスキーベースの甘いカクテル。うちではベースにCCを使っている。

話題の中心は専らバーの話題。あの店は、この店はって横のつながりが広い人の話には興味を惹かれる。途中から店長も加わり酒での失敗談で盛り上がった。

「皆川くん、ブラントンおかわりで」

「かしこまりました」

できるだけお酒の香りがかないようにグラスの中で丸氷をビルド、じゃないと二日酔いの頭に響く。

そんな時、ズボンのポケットに入れておいた携帯電話のバイブが振動した。バイブの間隔からメールだって気づく。

「皆川くんは失敗談ってあるの？」

「任せてください。それならだれにも負けません」

失敗談——昨日のことは言えるわけがない。寄って山手線に乗った途端に眠って、起きたらバスに乗っててどこかの大学に到着した話したらウソだと思われた。まあ、ウソにしか聞こえないけれどさ。

夜の9時を回ったところ、24席ある店の半分が埋まり始めた。これから忙しくなるだろう前に、店長が休憩を回してくれた。

レジの奥のデッドスペースの窓の下に飲み物のコーラを置くと、窓から歌舞伎町の町を覗く。平日だっていうのに活気は、地元の茨城の水戸とは大違いだ。そんなことを考えながらズボンから携帯電話

話を取り出すとメールを確認する。

> FROM <

齊藤由希

> 件名 <

昨日はありがとう

> 本文 <

お仕事お疲れさま。二日酔いは大丈夫かな。妹もかなり楽しんでたみたい。雅くんに聞きたいんだけど、雅くんの連絡先って恵理に教えても大丈夫？　なんかね、年上の人に恋愛相談したいらしんだけど、近くに話せる人がいないんだってさ。どうかな？

コーラを一気飲み。都庁で肺に入ったらしくせきが止まらなくなった。どうしても笑顔を作りたいときは頬の肉を少しだけ上げるようにすると笑顔に見える、そう昔だれかに教わったことがある。頬の肉？　なんなら今は下げたいくらいだ。

「店長お疲れ様でした。今日の売上はどのくらいですか？」

「水曜日にしてはまあまあかな」

10時を過ぎたところに8名の団体が入店し、けっこうな金額を落としてくれた。きっと送別会か何かの二次会だろう、モエにシャブリ、さらにはシャトー・ムートン・ロートシルト、大小のワイングラスがテーブルを埋め尽くしていた。

「皆川、途中からなんだか急に元気にならなかったか？」

気づかれたって思いながらも「そんなことないですよ」なんて発

した言葉はきつとしどろもどろ。

「ま、いいけどな。そうだ、エンジェル行こうぜ」

「お任せします」

一通り店内の片づけを済ませると4人で生ビールを1杯ずつのみ、その後は店長とエンジェルに向かった。

距離にすればおよそ100メートル、エンジェルはいつも女性客を中心に賑わっている。うちが男女比率4：6を考えると1：9は正直羨ましい。

「おふたりさん、いらっしやい」

「どうも」

「こんばんは」

店長に次いでカウンターに座る。見渡す店内には知ってる顔もある。「あ、どうも」「長澤さんこんばんは」そんな挨拶が終わった頃、おれの目の前にはテキーラのショットが並んだ。

「頼んでないですけど……」

「サービスです」

そう言うエンジェルの、宮下店長の笑顔が怖い。

「まあ景気付けに飲んでください。なんならサウザのボトルがブルーラグーンの名前で入ってますよ」

「だれが入れたんですか！」

「だれって高橋」

きつと二日酔いは三日酔いに発展し、明日は脅威上の頭痛と吐き

気が襲うことは簡単に予測できた。

「皆川」静かに店長が声を出す。「酒の1滴は……」
「いただきます！」

酒の1滴は血の1滴——醸造、蒸留する作り手の苦労は並大抵じゃないことくらいバーテンなら誰でも知ってる。故に1滴も残すな……キレイゴトだよ。勢いでショットをのどに流し込む。味なんてどうでもいい。

店長と宮下さんはなにやら見せの方向性や原価率の話始めた。その横で一応、手持ち無沙汰だしドリンクメニューを開いてみる。

「皆川くん、皆川くんにはメニューは必要ないでしょ。おかわりはテキ……」

「いえ、ジントニックをお願いします」

とりあえず、ロングカクテルを頼んで氷を溶かしつつゆっくり飲む、その作戦はいとも簡単に見破られ、目の前にジントニックが3杯並んだ。

2人の会話はまだ続いている。それが将来自分の店を持つと考えている自分にはカッコよく見えた。

「なんか羨ましいです」
「なにがだ？」

店長と宮下さんがこっちに視線を向ける。

「そいつ会話。おれもいつかは店長って呼ばれてそつなりたいです」

2人が目を合わせると、急に大声で笑い始めた。その笑い声があまりにも大きかったらしく、底にいたお客の1人が次の日うちに来て「なんだったの?」って質問された。

「皆川、お前は分かってないな」

「なにがですか?」

手にするジントニクのグラスの表面は、結露でびっしりぬれて
いる。

「経営者っていうのは、1人のときは泣いてるんだ」

1人のときは泣いてる——宮下さんが行ったセリフ、それはおれが数カ月後にブルーラグーンを、バーテンダーという仕事を辞める決断をした理由の1つかかもしれない。

けどこのときは気づかなかった。でも、酔っててもその言葉だけはなぜか覚えている。

「皆川、お前確か26だよな」

「は、はい」

「そろそろちゃんと将来のことを考えたらどうだ」

それから店長が話し始めたこと、それは今まで考えたことすらなかった。

たとえば普通、サラリーマンは65歳が定年だとする。じゃあ今まで何人の60歳くらいのバーテンダーにあったことがある? バ
ーテンダーという仕事に将来性を感じるか?

毎年開催されているNBA（日本バーテンダー協会）もしくはHBA（ホテルバーテンダー協会）の大海の優勝者が何人自分の店を成功させていると思う?

店を経営していくためには一体いくらかかっていくら借金して、そのためにはどのくらいの回転率が必要でどのくらいの客単価で、原価率はどうすればいいと思う？

自分が将来結婚したとする。するとパパは毎日夜いないんだ。それが悪いってわけじゃない、ないがどう考える？

「あ、あの……」

何も、何ひとつ答えられなかった。確かに酔ってはいた、けれど店長と宮下さんの目の奥にある何か、それが脳の活動を停止させ、気づけば指すら動かない。

「男の生きがい仕事だ。もちろんそれが全てじゃない、けれど自分の人生は自分で考える」

目の前にあるジントニックが全く別の飲み物に見えた。グラスの結露は静かに滴り、コースターの上でそっとその表面を張力させている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4818ba/>

カラフル

2012年1月13日02時59分発行